

未来に伝えたい「まいばらの水」12選

vol.14

深い山々が育んだ米原の美しい湧き水。このコーナーでは、「未来に伝えたい。まいばらの水」に選ばれた12か所をシリーズでお伝えしてきましたが、7月からは番外編として、地域と水の関わりについてお届けしています。

番外編②

米原の農業水利

農業水利は、大きく分けて山の谷水や河川水、湧水の直接利用、大きな河川の井堰からの取水、琵琶湖からの逆水灌漑の3つがあります。姉川の上流域や伊吹山麓、霊仙山麓などの山間部は、山の谷水や河川水を引き込み、扇状地などの湧水が豊富な地域では、湧水が利用されてきました。山間部でも水利の便が悪く、地形的な条件が厳しい集落では、田はあまり作られず、畑作や林業（炭や薪）で生計を立てていたところや、他の集落で土地を借りて田を作る人

もいました。

米原の代表的な農業水利は、出雲井（姉川合同井堰）と天の川合同井堰です。かつて姉川には、伊吹集落から長浜市東上坂までの間に20か所の井堰が造られていましたが、木造であったために洪水の度に流されてしまったり、渇水期には上流の井堰が水を独占したりして争いが起こったりとさまざまな問題がありました。現在の出雲井は、昭和28年に造られたもので、市の山東地域と下流域の長浜市までの約660（かつては850）ヘクタールにもおよぶ水田を潤しています。灌漑期で毎秒約3トン、非灌漑期で毎秒約1トンの水が取水されており、さまざまな分水施設を経て、網の目のように張り巡らされた水路へと送られています。



▲ 出雲井（姉川合同井堰）

特徴的な分水施設としては、扇形をした小田分水があり、出雲井からの水を小田上井と小田下井、長浜市北郷里地区の

3つに分水しています。この小田分水からの水をさらに分水しているのが、間田五川分水です。また、姉川に架かる井之口橋の少し上流にある井之口円形分水も、小田分水池から流れる水を、井之口と長浜市へ分水する施設です。

天の川合同井堰は、昭和32年、市の米原地域の一部分と近江地域の大部分を灌漑するために造られた井堰です。天野川には、もともと多くの井堰が設けられていましたが、戦後の森林濫伐がもとで、水量は夏季に減少し干害が起き、豪雨の際には急激な出水のために井堰が流出することが度々ありました。現在は天野川やその支流の丹生川の水を主に、琵琶湖からの逆水による併用灌漑となっており、約695ヘクタールの水田を潤しています。灌漑期で毎秒約5・8トン、非灌漑期で毎秒約0・44トンの水が取水されています。



▲ 間田五川分水



▲ 井之口円形分水

まいばらの水
イメージキャラクター
スイナちゃん

